

【研究ノート】

山口県における伝大坂城築城残石の現状について

荒巻 直大¹⁾

Stone materials at the Osaka-jo Castle construction in Yamaguchi Prefecture (仮)

Naohiro ARAMAKI

1 はじめに

当館が所蔵する大阪城残石（屋外展示）は、その伝来から、従来、毛利輝元が献じた豊臣氏時代の大阪城築城残石とされてきたが、当館研究報告43号「山口県立山口博物館所蔵大阪城築城の残石について」（以下「前報告」とする。）において、当館伝来および寄贈の経緯を明らかにするとともに、史料的知見から以前からもあった毛利秀就による徳川氏大坂城普請の際の石材の残石であるとするのが妥当であるという結論に至った。

本資料の採石場所である周南市大津島にある石切丁場の遺跡、遺構について、学術的調査等はされていないが、本報告では島内にある採石推定地の現状を報告するとともに、現在、県内で確認できる他の大阪城築城残石と伝わる石材の所在について、その経緯も合わせて報告する。

2 大津島の採石場所の立地と採石業・石材加工業について

大津島は山口県周南市に属し、徳山港から南西方向に約10.0km、徳山湾の北西から南の湾口にかけて、湾内の西を縁取るように位置している。周囲20.9km、面積4.76km²、南北約7km、東西約0.5～1kmの細長い沈水島である。平地に乏しく、やや起伏の大きい標高140～160mの丘陵性の地形をなし、最高点はほぼ中央に位置する大浴山（174m）、海岸線は緩斜面や海食崖によって囲まれ、東側に黒髪島、黒髪島との間に蛙島、樺島、北側に横島、南側に洲島といった小さな島がある。⁽¹⁾

島内で花崗岩を産出する石切丁場は島の北端部及び東岸部にあたる近江・瀬戸浜地区と菊尾地区である。大津島の地質は、大部分が三郡変成岩類黒色片岩及び緑色片岩で占められており、石材加工業に用いられる黒雲母花崗岩（花崗岩質岩石）は北東岸（近江地区、瀬戸浜地区、菊尾地区）に見られる。（図1 大津島北部及び黒髪島の地質分布図参照）

大津島における採石業および石材加工業について、『徳山市史』（上・下巻）から、以下概述する。

大津島の石材が徳川大坂城石垣用石材として大坂へ運搬された記録として残る1624年（寛永元）

1) 山口県立山口博物館（考古）

以前から、中世に良質の花崗岩を産出したことが推定でき、石鳥居、灯籠、墓石、葛石など寺社の石造物など美術工芸用や石垣、橋梁など土木建築用の石材を供給していたと考えられる。⁽²⁾

近世初頭⁽³⁾以降、藩政時代に徳山藩が本格的に石材採取の操業許可を出したのは1811年（文化8）からである。藩は大津島やそれ付属する小島の採石を免許制として、石工職に対して達

しをだし統制等を加えた。その際1827年（文政10）、公用石材の切り出し場所を大津島に指定している。これは以前「御用石場」と称していた所で、大石に「〇」の紋を付している。他領への売り出しは原則、厳禁としているが、その時々諸事情によって臨時の処置をとり、石材受注を許可している。しかしどのくらいの石材が他藩へ輸出したかは不明である。

明治以降では、荊尾地区の三石で企業化された採石業が行われるようになる。1889年（明治22）ごろ個人が県から採掘権を購入して、その後、明治後期からは愛媛県からの来島した個人によって経営が代わった。または愛媛県からの来島者が新たに採石業に参入した。山裾の小石をとって石垣用の石材を採取していたが、大正期には電気爆破によって大石の注文にも応じることが可能になった。昭和6年ごろには、石工職人約80人、月産1万才（27.8万リットル）、年算額15万円に及んだ。こうして採石・石材加工業が島を支える主要な産業となっていく。戦後も採石業、石材加工業は継続して行われていた。現在は衰微して島内に石材加工業はあるものの、石の切り出しは行っておらず、採石業は隣接する黒髪島で行われている。

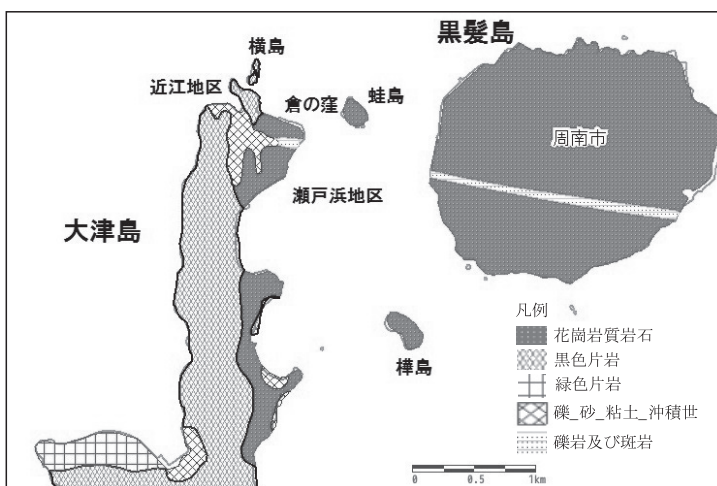


図1 大津島北部及び黒髪島北部の地質分布図(山口県環境快適づくりGIS)

3 石材の現状及びその経緯について

県内で確認できる、大津島産出の徳川大坂城築城と伝来のある残石について、以下詳述する。各資料の共通点はいずれも花崗岩製、方柱石状である。また法量等については、章末にまとめて付すが、大きさから大小2つの規格が認められ、大きさの規格に合わせて「〇」刻印の大きさと位置も異なる。

(1) 当館前庭の残石

前報告で述べたとおり、1930年（昭和5）7



写真1 当館前庭の残石

月1日に矢島専平氏から毛利輝元が豊臣秀吉大坂城築城の際、献じた石材の残石として寄贈を受けたものである。⁽⁴⁾これは1891年(明治24)から1893(明治26)までの間に大津島から下松町宮ノ洲の矢嶋邸宅⁽⁵⁾に運んだ2つうちの1つである。⁽⁶⁾⁽⁷⁾邸宅西門の前と邸宅内に庭石として置かれたという。(注:前報告で引用した大野雲譚の詩文参照。)大きさは大規格の石材である。小口部に前述の毛利家の家紋を示す「〇」が刻印されている。(写真1)



(2) 日立製作所笠戸事業所・^{のりこし}乗越クラブの残石

当館の残石とともに、矢嶋家邸宅にあった残石2基のうち1基である。寄贈者の矢島専平氏は1917年(大正6)、久原房之助の発表した「下松大工業都市建設計画」に賛同し、前述の矢嶋邸を工場用地として資したため、その後、東豊井・^{のりこし}乗越にあった矢嶋家の別邸に移された後、現在、日立製作所・鉄道ビジネスユニットが管轄する乗越クラブ⁽⁸⁾内に現存する。(写真2)



写真2 乗越クラブの残石

写真3 矢嶋邸水彩画 大坂城残石の庭石(小林重三筆)

大きさは大規格で、同様に「〇」の刻印がある。写真3に示した水彩画は画家・^{こぼやしげかず}小林重三⁽⁹⁾が矢島専平氏から依頼を受けて宮ノ洲にあった売却前の矢嶋邸を描いた水彩画群のうちの1つである。石材の手前にあるのは矢嶋家邸宅に使用された家紋入りの鬼瓦。



(3) 周南文化会館前庭の残石

大津島の倉の窪の船付場のから丘陵地際まで低湿地の沼地であったが、この地にあったという。大正期から昭和初期にかけて採石時に出る廃土でこの沼地を埋めたという。

1982年(昭和57)、周南文化会館の建設にあたり、大津島の石材会社がこの残石を掘り出し、当時の徳山市(現・周南市)へ寄贈したものである。(写真3)

大きさは大規格で、同様に「〇」の刻印がある。「〇」の横に扇形状の刻印も確認できる。

写真3 周南文化会館前庭の残石

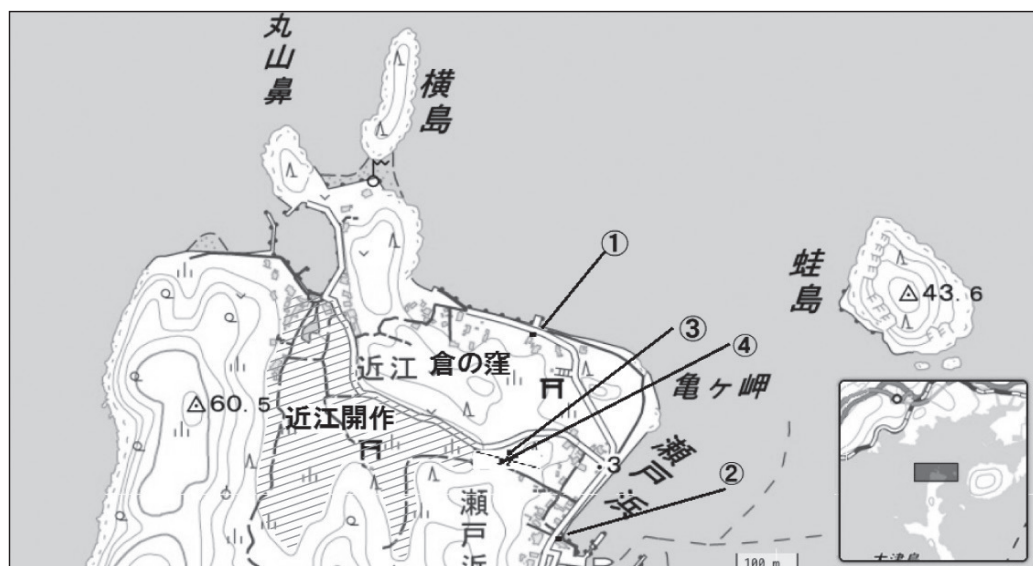


図2 大津島北端部 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「福川」を用いて作成)

(4) 大津島内で確認できる残石

現在、島内で確認できる石材は4基である。その中には切り出した場所から移動させたものもあると考えられ、切り出した石丁場の場所は特定しがたいが、地質分布からすべて島北端部産と推定する。各残石の現存場所を示す。(図2 大津島北端部地図)(本文中の①～④残石の所在位置が地図中①～④に一致する。)

なお、1690年(元禄3)、徳山藩によって、それまで入江であった推定される部分が干拓され、水田化(陸化)して近江開作(地図中 斜線部分)となるが、現在の近江巖島神社⁽¹⁰⁾あたりまで、入江地形と潮の満干を利用して舟が入り、石材の積み出しを行っていたという伝承がある。現在はガマの群生地となっている。この一帯の一部に花崗岩の巨岩が転石している。

① 大津島・倉の窪の残石

大津島の倉の窪集落内、荇田の波戸の近く、道路沿いに現存する。倉の窪集落近くで採石業が始まった明治末期にはこの場所に据えられていたというが、移動させた時期は未詳である。(写真4)

大きさは大規格で、同様に「〇」の大刻印がある。刻印の右に後世穿孔の補修とみられるコンクリート補修痕がある。



写真5 大津島・倉の窪の残石

② 大津島・瀬戸浜の残石

大津島の瀬戸浜(十人墓)集落の道路沿

い、荇田邸前に現存する。(写真5)かつては倉の窪集落の荇田波戸の奥の畑にあったという。時期未詳ながら掘り出され、1982年(昭和57)7月、福岡市長、進藤一馬^{しんとうかずま}氏が来島の際に、供覧するため石材会社社長荇田^{かりたしげ}氏が現在地に移した。

大きさは小規格で、「〇」の小刻印が中央やや上にある。中央やや下に後世と考えられ

る穿孔が確認できる。

- ③ 大津島・瀬戸浜集落・近江集落境の残石
1921年（大正10）、石材会社社長苅田光治氏⁽¹¹⁾が近江側採石場の石材搬出のため、瀬戸浜側に隧道を貫通させる際、発掘した。⁽¹²⁾大津島の瀬戸浜集落と近江開作地の境界線辺り、隧道の近江側に現存する。（写真6）近くに1978年（昭和53）建立の発掘記念石碑がある。

大きさは小規格で「〇」の小刻印が中央やや左に確認できる。下三分の一程度が土中に埋没している。

- ④ 大津島・瀬戸浜地区近江地区境隧道上の残石

前述の隧道の近江側、隧道が貫通している尾根の中腹にはほぼ埋没した状態で現存する。（写真7）

1981年（昭和56）2月、徳山地方郷土史研究会長の笹尾誠氏が発見したことを報文で紹介している。⁽¹³⁾

報文によると、「荒割りのままで、大矢（石切用の鉄の楔）で割った跡が鮮明に残っている。（中略）荒割りのままであることは、割損じて不合格品となったものか、また石の一部を石垣用等に切り取ったものであろうか。」とあり、大きさは小口部が縦約1,060mm、横不明、長さ約2,070mmと小規格に適合しない。切断面に100mmから110mmの矢孔列痕が約30mm間隔にあることが確認できる。

また、周辺の山中には、火薬による石切以前の転石を切り出した形跡が散見されるという。



写真6 大津島・瀬戸浜の残石



写真7 大津島・集落境の残石



写真8 大津島・隧道上の残石

現存所在場所	小口部		長さ (mm)	規格	刻印	
	縦 (mm)	横 (mm)				
当館前庭	1,160	1,301	3,060	大	大	
乗越クラブ内	1,160	1,300	3,180	大	大	
周南文化会館前庭	1,180	1,280	3,180	大	大	
大津島	① 倉の窟	1,170	1,270	3,150	大	大
	② 瀬戸浜の残石	1,060	1,020	2,430	小	小
	③ 集落境	不明	1,060	2,430	小	小
	④ 隧道上	不明	1,060	2,070	小未満	不明

表 県内残石の法量一覧

4 結語および検討課題について

大津島の採石推定地の現状と県内の大坂城築城残石として伝わっている資料の現状とその経緯について報告した。大津島では大坂城へ石材を輸送した寛永期以前から採石業は行われていたと推定できるが、近世以降、特に文政期以降、公用石材として「〇」の刻印のある石材を産出している。また近江・瀬戸浜地区では近代以降、特に昭和初頭に、盛んに採石しており、大坂城普請時の採石地については不詳である。

前報告で、引用した史料から大坂城築城に大津島から98基の石材が運ばれる予定となっていたが、実際に大坂城まで何基運搬されたかは不明で、未輸送の石材がいくつ残されたのか不明である。また、現在県内で確認できる現存する石材が大坂城に運搬されずに放置されたものか、その後、採石業が行われていた近世期の産出した石材が近代以降もそのまま残置されたものか、不明である。両者が混在していることも考えられる。

前報告で大津島の残石の個数について叙述した詩文には、近世末期、1850年（嘉永3）には30個余り、1893年（明治26）には7個とある。前述の大正期に残石を新たに掘り出したことを勘案すると、現存する残石の数が徐々に減っており、これらの残石を他の用途に転用したことをうかがわせる。

なお、大津島の東に位置する黒髪島も花崗岩を産出するが、大坂城普請にあたって採石地があったどうかは不明である。

以上、大津島の大坂城普請時の採石地については不明な点が多く、遺跡の調査も含め今後の研究が待たれるところである。

謝 辞

本報告作成にあたり、下松市網野ゆかり氏、周南市生涯学習課長川上浩史氏に資料調査のご教示ご助言を、下松市立図書館長長弘純子氏及び下松市郷土資料展示収蔵施設「島の学び舎」の方々画像提供及び情報提供についてご尽力いただいた。周南市大津島^{あけみ}刈田曙美氏に大津島での現地調査についてご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げます。

注

- (1) 大津島から大坂城までの直線距離で約360^キ。
- (2) 島内における社寺の花崗岩製石造文化財の銘文から正徳期から文政期までの石造物が確認できる。
- (3) 1620年（寛永元）大津島は下松藩領^{かんえい}
- (4) 防長新聞1930年（昭和5）7月2日の記事には「豊臣秀吉築城の石垣用石材を黒髪島から掘り出して、矢島邸に運ばれたうちの1つを寄贈した。」と伝えている。
- (5) 塩田事業等で巨額の富を築いた豪商・磯部家（屋号：宮洲屋^{みやのす}）の別邸（「覧海軒^{らんかいけん}」）を専平氏の父である矢嶋作郎氏が買い取ったもので、現在下松市、大谷川下流東岸にあり、川と

県道笠戸島線366号に挟まれた一角にあったが、現存せず。現在、東洋銅鉄株式会社下松事業所の敷地内の一部

- (6) この時点で大津島に7つの残石があったという。(前報告より)
- (7) 大津島から宮ノ洲矢嶋邸までの直線距離で約15^{キロ}。
- (8) 日立製作所笠戸事業所のゲストハウスとして利用されている施設で一般公開はされていない。別邸の一部も移築された。
- (9) 小林重三：1911年(明治44)～1971年(昭和46)鳥類画や動物画などの博物画を数多く出版物に残した画家。
- (10) 近江巖島神社は大正年間に瀬戸浜より移転したもの。
- (11) 荻田石材会社社長。荻田稠氏の父
- (12) 『都濃郡誌』によると1922年(大正11)4月にも山中に埋没していた石材を掘り出したとある。
- (13) 笹尾83 PP52-53

参考文献等

- 中川 明子・石丸 七海・津森 省吾・森 正太郎・中嶋 泰史
「周南市大津島石柱構造物に関する研究」 徳山工業高等専門学校 研究紀要 第41号 2017
- 笹尾 誠 「徳山湾内の大坂城の残石」『徳山地方郷土史研究』第4号 徳山地方郷土史研究会1983
- 川上 浩史 「山口県の石切丁場」『ヒストリア別冊』 大阪歴史学会 2009
- 徳山市史編纂委員会 徳山市史上巻 徳山市、 1984
- 徳山市教育委員会編 徳山市の社寺文化財調査報告書・資料編 徳山市 1991
- 北垣 總一太郎「石垣構築技術の発達と石材の規格化」『ヒストリア別冊』 大阪歴史学会 2009
- 快適環境づくりシステム 山口県環境生活部環境政策課山口県GIS
- 荒巻 直大 「山口県立山口博物館所蔵大坂城築城の残石について」山口県立山口博物館研究報告43号 2016 山口県立山口博物館